

2016年度国際化に関する外部評価を受けて

副学長・グローバル教育センター長 福田好朗

文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU事業）」の採択を受け、3年目の事業が終了するに当たり、SGU構想調書で掲げた施策が、どの程度実現でき、どの程度成果が挙げられているのかについての外部評価が行われた。この事業は、2023年までの10年間の事業であり、最初の3年間は、法政大学が掲げるグローバル大学への仕組みを作る期間である。おおよそその仕組みが出来、実施され始めてきて、法政大学のグローバル大学の姿が見え始めた時期である。外部評価の委員の方々も、大規模私立大学が、全学でグローバル化していく過程で、どのように仕組みが作られ、それが機能しているか、課題があるのかという視点で評価をしていただいた。

SGU事業の取り組み状況は、構想調書に掲げた制度・仕組みはほぼ整ってきており、施策の実行においてもおおむね順調に進捗していると評価いただいた。特に、SGU事業によって、法政大学を発展させるという意識が全学的に広がりつつあるという点について高く評価された。そして、これは、大規模私立大学で、このような事業を実施し、理解を得るために、学内での合意形成に注力していることがあげられている。

一方、数値目標を含む目標値については、全体的には、目標値に向けた伸びを示しているが、当初設定した目標に未達の項目も多いので、整備した仕組みや制度を効果的に運用して成果を挙げるように努力すべきであるとの指摘も受けた。個々の事業に対する指摘は、各委員の報告書に記載されているので、ここでは、詳細は述べないが、それぞれの確かな指摘がなされているので、今後の事業の推進の際に留意していかなければならない。

今年の評価では、この3年間で開設した英語学位プログラムについて、開設までの経緯、募集、初年度の学生などさまざまな角度から評価を行っていただいた。英語学位プログラム開設までの努力が高く評価された。特に、学部レベルのプログラムの成功と安定について高い期待が寄せられているし、他の大学も注視しているとのコメントもいただいている。一方、安定的な受験者数の確保、学生の質のばらつきをどうしていくか、従来の学部学生と英語学位学生の関係についてなどの課題も指摘された。

初期の制度構築の時期の3年間については、おおむね順調との評価をいただいたが、これらの制度を定着化させ、成果を挙げるために、より一層の努力が必要である時期を迎えることになる。今後とも全学の各部局がグローバル化に向けて積極的に取り組んでいただくことを期待する。